

あを 8

2017



松ノ日の
ぐちやうと
赤カバ

朱和

秘典

朱雀
瓦當
榮寶堂
製



あそ

八月



髪切蟲

東京

佐藤 喜孝

本籍地問はるる髪切蟲のこゑ
夏の海雨が降ってゐるらしい
電話口といふところあり冷さうめん
老人は水のなかから目をつかふ
手渡ししの錠剤零す冬の猫

青嵐

千葉

黒澤 佳子

風に乗り芝刈る音や網戸越し
鎌倉の切通し抜け竹落葉
立ち話垣根越しなり夏至の夕
母浮かべ小走り球児夏至の夕
洗濯挟み付け直す指青嵐



東京

七郎衛門吉保

夏の入り

穴あきのジーンズに見ゆ夏の入り
シャボン水吹いて膨らみ七変化
田の道や声のなはばり青蛙
右傾化や抜いても抜いても夏の草
奔放な高校生の句の涼気

東京

篠田 純子

夏

袖ひらり裏見せる時エヒ笑まふ
ももいろの先は粉めく花式部
ビル古し屋上にある鴉の巢
地に落ちて子鴉キョトリ首まはす
女子寮生大広間にて浴衣裁つ

石川

定梶じよう

網戸

明滅の明の永きは勝ち螢
丸めるな今日の朝刊油虫
遠雷や船にひとりの時どよむ
離水せんばかり白帆へ海南風
そと海のをさをさの網戸たててけり

埼玉

須賀 敏子

天竜浜名湖鉄道

蜜柑咲くゆるりゆったり天浜線
竜ヶ岩^{りょうがしど}洞^{どう}滴る山の奥の奥
転車台油のほひ浅き夏
青田風古き駅舎は文化財
浜名湖や湖面の際の夏列車



東京

田中 藤穂

絵本

泰山木の花の上なり昼月は
梅雨冷や医院待合室の絵本
えごの花散るや雨読の方丈記
雨ふふむ椎闇に入り大宰の忌
頭の上を過る鳥影夏至真昼

三重

長崎 桂子

夏の海

時節の市産物自慢の枇杷を買ふ
夏の海あゆむズボンをたくしあげ
飛沫浴びこち良きかな夏の浜
磯蟹の駆けずり回る見入りをり
干潟に穴無数鯊の子鉢合せ

千葉

早崎 泰江

雑詠

梅雨晴間一茶擬きの雀かな

大賀蓮発祥の地の公民館

古代蓮青い蜻蛉がきて止まる

東京

森 なほ子

信濃川

遅れけり日陰木かげを辿り来て
夏野菜あるだけ入れしカレーなる
日のさせば発火しさうなアマリリス
待つことが上手になつて茹煮をり
夏の海へ水押し出せる信濃川



東京

赤座 典子

山梨市

真緑の桃の実の待つ袋掛
甲州種実の小さかり桜桃
甲州ワイン夜景にかざし夏館
富士を背に柏葉あぢさゐ朝の風呂
根津邸の縁去りがたし閑古鳥

埼玉

秋川 泉

枇杷の実

三角の口を並べて燕の子
路地裏に爺の売りゐる夏野菜
夏めくや髪のリボンの透きとほる
枇杷の実や隣家まで延ぶ枝の先
文をかくはじまりは雨みなづきの

東京

石森 理和

紫陽花

紫陽花の車窓に続くスイッチバック
蕎麦処ぐるり廻りを今年竹
飛ぶ鳥の影を落とせり苔の庭
姫沙羅の高々伸びて夏の雲
梅拾ふどうぞと言はれ挽ぎもして

埼玉

大日向幸江

天の川

天の川未来へ向ふ舟を出し
フラメンコ灼熱の夜を踊りけり
荒川の河口広びろ沙魚を釣る
吉左右を待ってをりたり鶴
帰省子の後に残りし蟬時雨



庭の枇杷わたしがゐるやうに剥く 佐藤喜孝

五月雨や声押し殺し鳴く鴉 大日向幸江

小窓から見通す桜夕日浴び 黒澤佳子

立夏かな玻璃の器に茶を点てり 七郎衛門吉保

手押車に園児六人風青し 篠田純子

羞ぢらへるやうなりあやめ雨上がり 定梶じょう

急変の空に向かつて黒揚羽 須賀敏子

鳴子百合葉蔭に咲きてうすみどり 田中藤穂

人住まぬカラフルな夏の草花 長崎桂子

言の葉に遊びし人や青嵐 森なほ子

青嵐 S L の乗る転車台 赤座典子

亀鳴くや用事そのまま日の暮るる 秋川 泉

目覚しは驚しばし聞き続け 石森理和

小袋を提げて二人や京の夏 井上石動

喜孝抄



六月号作品より

秋川泉・森なほ子・佐藤喜孝

点滴の空になる間に鳥は花

佐藤 喜孝

点滴が一滴つつ病む人の体に入つていきま
す。長い時間をかけて大きな容器から一滴また
一滴……。この容器が空になるまでに、鳥が
花になるような奇跡が起きてほしいと祈る作者
の姿を思い浮かべました。(なほ子)

残したる伽羅のかをりや虎が雨

井上 石動

ふとした時に、微かな伽羅の香りが。その香
を残して去った女性を懐かしく思い出していま
す。嗅覚は五感のうちで最も強く記憶と結びつ
いているといわれます。虎が雨とは、曾我兄弟
が討ち死にした日は雨になることが多く、愛人
の虎御前の涙雨である、という言い伝えからで

きた季語ですので、この句に相応しい季語です
ね。「残したる」は、身近な親しい方、多分奥
様のことであろうと思われますが、勿論違うひ
とでも。(なほ子)

透け見ゆる土手の夕暮れ木芽和

井上 石動

「透け見ゆる土手」とは、土手と見る人の間
に何か、例へば木の間越しに見える時に使ふ。
しかしわたしには夕まぐれの摩訶不思議な光線
の綾で土手そのものが透けて見えたやうに読め
た。しかしこの読みは下五の「木芽和」であへ
なく独りよがりと分かる。しかし無理筋でもか
う鑑賞したいわたしがゐる。この短文で「しか
し」を三回も。悪文である。(喜孝)

カレンダーめくるや泳ぐ鯉幟

大日向幸江

五月のカレンダー。「めくるや」の言葉に勢
い良く泳ぐ鯉幟と一気に季節が初夏に移ったと
云う事を感じます。お部屋はすっかり五月の香
につつまれたことでしょう。(泉)

回収船花びら掬ふ目黒川

黒澤 佳子

目黒川の堤のみごとな桜並木。その花々が散
ると云う事は、回収船が出て花びらを掬う。そ
れほどまでに花びらに埋もれてしまう光景は、
さすが目黒川の桜なのですね。(泉)

掃き集め小山なしたる紅椿

七郎衛門吉保

次々と落ちつつ咲き継ぐ椿、大木ならなお落
ちた花の嵩は半端ではありませんね。掃き集め
れば小山のよう、風情どころではありません。

そこを目に留めて一句にされたところが諧謔味
溢れる作者らしい句と思います。(なほ子)

吉保さんは俳句をはじめられたのが数年前、
俗に云ふ晩学である。そこで吉保さんは後れを
取りもどさんと知識を湯水のごとく吸収してゐ
る。「作るべからず集」に載りさうな句も多く
吐きだしてゐる。デドックスなのであらうか。
かうしなければならぬ体の欲求が無くなるのを
待つしかないと思ふ。紅椿の句はさういふ中で
生まれた清涼剤。下五「落椿」とすると忍ち格
が落ちてしまふから俳句はおもしろい。(喜孝)

右麻痺の右手と繋ぐ花マロニエ

篠田 純子

マロニエの花の下を麻痺の残るご主人の右手
をとって歩いています。強く握つても以前のよ
うには握り返してはこない右手かもしれませ

ん。少しずつ快方に向かうことを信じて今日も
しっかりその手を取って歩いています。明るく
力強いマロニエの花が暗示的です。(なほ子)

地下吹抜けの樹より地上へ花ぶぶき 篠田 純子

作者は東京のご真ん中で生活してゐる。えて
して隣の芝生は見るが、自分のことは見えにく
いものだ。作者は身辺の変化に素直に驚く。こ
の句も自然界にはない不思議な空間。しかし
たら桜の梢が眼前にあるかも知れぬ。「地下」を
省いても作者の画く景は見えると思ふ。(喜孝)

抛りどころなく花吹雪くぐりけり 定梶じょう

花吹雪の中を歩いていく、確かにめまいがし
そう。何か動かないものに掴まりたくなるで
しょうね。でもどこにも抛りどころがないので
す。美しいどころではなく、早く通り過ぎてし

まおうと……。そういえば以前のじょうさんの
濃霧の句に通じるものがありますね。(なほ子)

欲の字の旁りがあくび春蘭けて 定梶じょう

「海よ、僕らの使ふ文字では、お前の中に母が
ゐる。そして母よ、仏蘭西人の言葉では、あなたの中
に海がある」は三好達治詩『郷愁』の一節でよく知
られてゐる。漢字や言葉のひらめきからの風景が
描かれてゐる。

「欲」の右側は「欠伸」じゃないか、と気がついた
時、人生の摂理(とまではいかないか?)が見えた
のかも知れない。ただの春蘭けてではなく幾たびも
春秋を越えてきた春蘭けてである。機知の句に見え
るが述べたやうにさうではない。

さて、欲と欠伸はいかにと云はれると深い哲学が
あるやうに思へるからおもしろい。(喜孝)

単線や時に特急諸葛菜 須賀 敏子

山に行かれる事の多い作者は、どちらでこの
光景をご覧になったのでしょうか。単線なのに、
そこに特急が通過する。ありありと目に浮びま
す。花だいこんが愛らしく美しい春の景色が思
われます。(泉)

かげろへるものに赤子の蒙古斑 竹内 弘子

この句を含む五句、題が赤とあるので、「赤」の
題詠と思われます。どの句も面白く読めますが評
を書くのは私にはなんとも難しいです。(なほ子)

恐龍の歩きぬし山桜満つ 田中 藤穂

地球上では過去五回、大規模な生物の絶滅が
起きたとされる。恐竜が生きていたとされる
二億二千五百万年から六千五百万年前の恐竜

の頭部の化石が北区でも発見されている。その
大地の山いっぱいにあふれ咲く桜。時空を超え
た何とロマンあふれる句でしょう。感性の瑞々
しさに感じ入りました。(泉)

宙深く吸はるる落花モーツァルト 田中 藤穂

寺の境内で石に腰掛けて喬い梢からときをり
はらりと枝を離れ不思議な動きをしながら花び
らが散り始める。呼応するかのやうにとなりの
木からもすーと枝をはなれる。一杯やりながら
左見右見してゐると、ある一片が高く舞い上
がった。まさに掲句の景である。凡夫のわたし
にはその時何も聞こえてこなかった。モーツァ
ルトの何曲と指定せぬ事が奥ゆかしい。交響曲
でもレクイエムでも勝手に読者が鳴らせばよ
い。わたしはけふ寝る前にクラリネット五重奏
曲でもかけやうかな。(喜孝)

養花天酒盛の老ゆるゆるり

長崎 桂子

養花天は花曇りのことですから外での酒盛りですね、老人会のお花見でしょうか。歌や笑い声は賑やかでもやはり動作はゆっくりで、このまま時が止まりそうな。ゆるゆるりがいいのです。(なほ子)

花吹雪おもはず眼鏡はずしたり

早崎 泰江

作者は降りかかる花吹雪の真中にいらしたのでしょうか。幻想的な花吹雪は、その瞬間、異世界に誘われる気分が致します。その刹那での「おもはず……」でいらしたのでしょうか。(泉)

咲き初めし日も散りし日も花の雨

森 なほ子

美しい桜の季節。咲き出した日も散る時も雨。本当に花の頃はこの句の通りですね。花がひら

比来披見

ホトトギス 七月号

夏服は若き日のもの着ることに	稲畑 汀子
橋涼み隣の橋を眺めつつ	稲畑 廣太郎
沖 七月号	
予報士の神田祭の話より	能村 研三
雨月 七月号	
幼子の顔いっぱいのしゃぼん玉	大橋 暁
槐 七月号	
接木終へはや一木となつてぬし	高橋 将夫
馬酔木 七月号	
一掬に揺る新緑五十鈴川	徳田 千鶴子
風土 七月号	
荒々と虚子忌のさくら畠に鋤き	南 うみを
京鹿子 七月号	
鉄線花町会長の任解かる	鈴鹿 呂仁
七花 七月号	
農小屋の茶室によりか炬を塞ぐ	山田 七甲
万象 七月号	
大揺れの森を巣立ちのつばくらめ	大坪 景章
山吹の挟まれてゐる寺の木戸	内海 良太
春燈 七月号	
木々挙り天指す夏に入りにつけり	安立 公彦
鳴 七月号	
ああ言へばかうといふかに蜷の道	高橋 道子



喜孝抄

空 72号

苗木市雨は光の筋となり	柴田 佐知子
末黒野 七月号	
鶯や父祖の墓域へ声ゆたか	小川 玉泉
長閑けしや寺の耳門の少し開き	松本 三千夫
雲の峰 七月号	
桜桃やふるさともや他郷めき	朝妻 力
萱 八月号	
炎天や鸚鵡は籠を咬み潰し	木村 嘉男
虚子の句を口ずさみたるさくらんぼ	亀田 虎童子
嬉しい日ときどきありて鳳仙花	小島 良子
霽 七月号	
何鳥彼鳥悲観桜のにぎにぎし	松林 尚志
若楓風に小蜂をとばしけり	藤田 宏
こだま 六月号	
水遣る鉢増えて小庭も緑さす	松林 尚志
ローマの釘	中原 幸子
温める温めなおす春の宵	
たんぽぽやにこつとされてむかつとす	
行く春の息つめてから鳴る電話	
ほらごらん猛暑日なんか作るから	
水澄むや頭が よくておばかさん	
ジョギングで届きいんげん豆みどり	
開閉のボタンは対に夜は秋に	

戦争の胸騒ぎする花吹雪

秋川 泉

く前からはららと散り終えるまで心は桜のことがいとも気にかかります。(泉)

大きな力が少しずつ世の中の方角を変えてゆくような不安を感じる昨今。美しい花吹雪に、なぜか戦争の予感に胸騒ぎを覚える作者です。桜にはその散り際を称賛された歴史があります。そんなことを思い出させる今年の花吹雪だったのですね。(なほ子)



あをキーワード俳句辞典（なかーなか）

長雨

長雨にシャネルの香りつけにけり
容赦なく秋の長雨老いを打つ
長雨や栗の渋皮煮にトライ

永井荷風

六区正月永井荷風に似たる人
春陰や永井荷風の靴の泥

長生き

長生きの金魚跳ねざま鯉に似し
梅雨晴れ間長生きをして長電話
敬老日長生きをしてさびしかり
母よりも長生きをして花吹雪
一畝に茄子と蕃茄と母長生き
長生きの呪文のやうに野遊びす

長椅子

柿若葉長椅子にふとまどろめる

長靴

初雪や戸棚の奥のゴム長靴
長靴に鬱とじこめて雪の中
薄氷を柔らかく踏む長靴かな
村人の長靴ブーツ初詣
炎屋に長靴如雨露並びをり

寒の雨長靴欲しと謂う子あり

七郎衛門吉保

長さ

桃色の帯の長さや花海棠
サーバーの影の長さよ秋のコート
冷しさうめん吸る十年の長さかな

長崎

ロザリオを心の妻と長崎忌
長崎の海に育ちし飛魚到来
長崎の平和の鐘や雲の峰
日曜日一人黙祷長崎忌
片陰に黙祷始む長崎忌

流し

夏の風邪流しに蟻の二三匹
紫蘇揉んでいちめん赤き流し元
青森の流しに溢る路の臺
年つまる外の流しに半日を

鳴かず

かなかなの今年も鳴かず秋半ば
はやばやと蟬鳴かずして仰向けに
バケツにて飼うて亀また鳴かずけり
鴉鳴き雀の鳴かず梅雨の朝

流す

須賀 敏子

赤座 典子

堀内 一郎

松本 米子

東 亜 未

芝 尚子

須賀 敏子

赤座 典子

山 莊 慶子

竹内 弘子

石 森 理和

長 崎 桂子

田 中 藤穂

早 崎 泰江

定 梶 じょう

佐 藤 喜孝

渡 邊 友七

佐 藤 喜孝

長 崎 桂子

長 崎 桂子

佐 藤 恭子

東 亜 未

田 中 藤穂

須賀 敏子

須賀 敏子

石 森 理和

佐 藤 喜孝

藤 野 寿子

藤 野 寿子

堀 内 一郎

泣かせ

掌の中に蟬泣かせをり生きるべし
姉さんを泣かせし春の昼のこと

中空

風花や中空の青小紋柄
児が駆ける中空に春兆しけり

中々

静けさの中中で待つ蒼かな

半ば

朝涼の風の後押し坂半ば
かなかなの今年も鳴かず秋半ば
冬なかばパソコン閉じて今日終る
一病を持つて集ひし夏半ば
大夕焼旅行半ばのドレスデン
八月が澤山ありぬまだなかば
志半ばのドラマ冬燈
咄家の話半ばに羽織ぬぐ
幾度も息を吸はされ寒半ば
青田風減塩菜食まだ半ば
退院の弟の泪梅雨半ば
無駄づかひ買ひ占めもせず春なかば
吉日を半ば信じる小鳥の巢

竹内 弘子
栢 森 定男
関口 ゆき
鈴木 多枝子
鎌倉 喜久恵
長 崎 桂子
長 崎 桂子
齊 藤 裕子
森山 のりこ
森山 のりこ
齊 藤 裕子
定 梶 じょう
田 中 藤穂
長 崎 桂子
篠田 純子
鎌倉 喜久恵
石 森 理和
須賀 敏子
竹内 弘子
篠田 純子
石 森 理和
石 森 理和

サーファアの沖へBGM流す
横たはる鯽が地上に血を流す
鯉のぼり百を流して町おこし
流されまいふんばりつづけ水馬
藪巻に汗流す僧スニーカー
暮の秋風に流さる蝶の翅
流されて春の大川魚群れ
漣を流してをりし春の風
春雷や下界の芥流し去る
モツアルトの調べ流せる新酒蔵
受け流す母の繰言猫柳
町の銀座春宵流す演歌など
紫陽花はローランサンの色流す
燈籠を流し原爆の日を祈る
蟬しぐれ胸のつかへを流しけり
仰向きの椿流して春の川
流さるる子等の歓声青胡桃
台風がドレミファ橋を流しけり
芽柳や魚屋水を流しづめ
アメンボが流されて行く桜桃忌
背流すやうに墓石を春彼岸
牡丹雪横に流され十五階



佐藤 喜孝

精しくないが旧海軍・海上自衛隊共に船名は雅である。なかに「はしだて」という海上自衛隊が有する船がある。一門も大砲は有せぬ特務艇。この船のコックは選りすぐりとのこと。また、山陰線には特急「はしだて」が走ってゐた。思ひ付きで付けたがだんだん気に入ってきた。ある人から「厳しき意見のみ欲し」といふ希望を戴いたが、句会では当人に云ふ事が出来るが、気弱なわたしには誌上ではさういふ訳にはゆかぬのでご容赦を。

赤座 典子

大西日厨の小物影の濃く
見張りゐる巢はあのあたり大夏木
夏料理に留守居の人を誘ひけり
梅雨明けと云へど沖繩慰霊の日
「命どう宝」向きあふことを忘れまい

梅雨明けと云へど沖繩慰霊の日
「命どう宝」向きあふことを忘れまい

「命どう宝」（ぬちどうたから）とは、沖繩で「命こそ宝」という意味の言葉。平和運動のスローガンとして用ひられる。六月二十三日のこの日を、沖繩県慰霊の日とした。沖繩忌とも詠まれる。わたしは沖繩が本土復帰の時、日本に帰らず独立すればよいのに、こんなにかく思つた。今は全く違ふ。今の日本にとって沖繩の人の心・空・海・歌はまさに「沖繩どう日本の宝」と思つてゐる。高円寺の沖繩料理店で数回そばなど食べたが泡盛以外は好みに合はなかった。それにしても忘れていけない事が多すぎる。

石森 理和

古民家に仄と紅さす小梅かな
大蓮に不忍の池占拠さる
背丈越す大蓮に露大水晶
大蓮に弁天堂も隠される
育つ子を見上げる様に蓮の花

古民家に仄と紅さす小梅かな

人が住んでゐるのか、民家園の古民家なのか定かでない。どちらにしても煤けた太い簾などが想像される。そこに仄かに紅を差した小梅の花を配した。民家も小梅も生き生きしてきた。「大蓮に弁天堂も隠される」は、「大蓮に弁天堂の埋もれたる」と素直に作ればよい。が、「古民家と小梅」と比べると「蓮と弁天堂」は仲が良すぎる。

七郎衛門吉保

老鶯やプリマドンナの響きして
ギイーギヤーと守る尾長や茂りに巢
夏の熊出で来話題の温泉町
空梅雨に川よこたはるダム湖底
ゴンドラや外壁洗ふ夏の揺れ

空梅雨に川よこたはるダム湖底

“よこたはる”が作者の確かな眼。ダムが干上がると以前の生活の痕跡まで出現してなんともいへぬものである。俳句は説明しないとよく見聞きするが、さて実作にあたると実作にあたると五里霧中になるものだ。“空梅雨に”を“空梅雨や”または“早梅雨”とすることに

より説明臭を避けることが出来る。そこで終はらず“川よこたはるダムの底”をじつと眺めてゐると、ある想ひがわたしには湧いてくる。満々と水をたたへたダムの底を以前と変はらず川が流れてゐる景が見えてくる。頭の中の景色である。

定梶 しよう

猫の絵の「捜しています」猛暑の塀
この不安赤潮満ちて来つつあり
かきつばた覚皇院は禅寺で
廃校舎梅雨の簷滴なつかしむ
函船が曳くタグボート梅雨ぐもり

廃校舎梅雨の簷滴なつかしむ

しとしとと降る雨は嫌ひではない。好きな方だ。雨を眺めるしかない時間は得難い。“のきしずく”とは云はず“えんてき”と。雨だれのリズム感が出てくる。母校であらうか。今は校舎として使はなくなった校舎にゐる作者。少年の日の既視感に襲はれた感じがしたのだろう。簷滴すらもなつかしいと思ふ齡にわたしもなった。

かきつばた覚皇院は禪寺で

句会の評で短冊に書くとか佳句だとか、活字に乗る句だ、と高島茂はよく云つてゐた。好意的に云つてゐるのである。近頃では「短冊に書く句だね」というと否定的に取られるらしい。云つた方も否定的に云つてゐるのかも知れないが。短冊に書くとか映える句とはどのような句であろうか。覚皇院は輪島市門前町にあり一三九九年創建。古くから開けたところのやうである。何も心情を吐露してはゐるやうにはみえぬが、句末の「で」は何か云ひたさうである。

篠田 純子

女子寮薄暑とびら五つを開け自室
絡みあふと見えて絡まず水母の尾
親よりも大きペンギン夏至の昼

絡みあふと見えて絡まず水母の尾

水母の尾は何処にあるのかと迷つた。あの何本も笠の縁からぶら下がつてゐるものをいふのだらふ。人間は二本の脚でもままならないのに、水母や百足は何と器用な

のか。水母には脳も心臓もないさうだが予測の付かない水母の動きを水族館などで眺めてゐるとなぜか癒される。そんなをりの作品。

大日向幸江

雪とけて八海山の怒り肩
チリチリと火花散るごと鳥盛る
サイダーのやうな滴り山の水
練り込んで伸して新蕎麦鄙の村
開拓の志未だ秋まつり

雪とけて八海山の怒り肩

作者は見立てに独特な眼を有してゐる。見立ても「あさうね」と常識の範囲だと目に止まらない。火花↓鳥盛る、なども作者が意図した程ではない。八海山の画像を見たが「怒り肩」は、云はれて初めてそう見れば見えると思つた。「雪とけて↓怒り肩」の間にある云はない言葉が解らなかつた。この怒り肩が形状の譬へで終はるのは惜しい。

秋川 泉

今朝は早色錆び泰山木の花
タブレットポンとタッチし夏の海
朴の花ひと夜にひらき香の溢る
枇杷食べて黒き大きな種の嵩
鏡鏡に紫陽花溢れ美容室

鏡鏡に紫陽花溢れ美容室

泉さんは表現に工夫を凝らしてゐる。鏡が沢山とは云はずに「鏡鏡」と鏡が並んでゐる様を言葉で画いてゐる。美容室にゐるうきうきとした心持ちが句からあふれてゐる。

長崎 桂子

草いきれ青は濃淡丈高し
草むしり蠢くものを追ひ払ふ
言ひ付かる教へ従ふ茅の輪かな
夏の蝶朝の庭に纏ひつく
梅雨の蝶去年より煌びやかなり

夏の蝶朝の庭に纏ひつく

わたしにもこのやうな体験が何度かある。蝶の本能の行動であらうが、人は蝶のおもひとは関係なく何かを感じ思ひ入れてしまふ。桂子さんはその辺りをさりと「纏ひつく」とされた。これから始まる一日の吉兆である。「梅雨の蝶去年より煌びやかなり」は五五七音。十七音であることには違ひがないが耳になじまない。少し言葉の順序を変へて「梅雨の蝶煌びやかなり去年より」とすればなめらかに読みやすくなる。じょうさんが書かれてゐたが、散文のやうに書かなくとも、いや書かない方が大方よろしい。

井上 石動

露草をよけて行きけりアシツクス
くちなしは梔子色に果てたるぞ
すゞ風や町家の庭の水の音
川づたふ風は細けし落シ鱧
川音の貴船奥道鮎の宿

くちなしは梔子色に果てたるぞ

梔子色は「クチナシで染めた黄色に、ベニバナの赤をわずかに重ね染めた色」。たしかに梔子の実は黄色に

橙色が重なってゐる。中七までは気持ちが良い。下五はしつかり“FIN”にする事もない。余情をもって終はりたい。石動さんの句にわたしならだうするか考へてみた。「露草をよけて行きけりアシックス」の露草は露を帯びた草。履きおろしのお氣に入りのスニーカーを露に濡らさぬやう歩いたといふ句意か。ならば句帳に留めておく。「川音の貴船奥道鮎の宿」の川音が氣になる。鮎の宿↓川音では展開がない、一句の中が連句だとおもつて考えることも出来る。ただ京都を余りにも知らないの
で場違ひな事を述べてゐるかも知れぬと危惧してゐる。

田中 藤穂

若者も児も足長し浜豌豆
廃校の遠近の崖山百合咲く
焙じ茶を熱く淹れをり梅雨夜明け
夏燕友もう在らぬ門潜る
旧懐のごとし風呂場の蚰蜒よ

旧懐のごとし風呂場の蚰蜒よ

風呂場は湿つてゐて蚰蜒が好む場所なのだらう。男で

も入浴中にこんなものにお出ましになられたら対処に困る。それを見事「お久しぶりね」と一句ものにする心意氣に脱帽。蚰蜒だからこそ旧懐が俳諧にしている。

32頁から

とくに貴作の「晝顔」は植物の晝顔であると同時に晝間のおおというイメージが効いていておもしろく味わえます。拙作では「語る残花」の語るの部分に作者として捨て難いところがあります。

これまで誰もいかなかった俳句を求める気持ちは俳人として誰しものことでしょうがそうはなかなかうまくいきません。等類句に何でもいからプラスアルファを期待するそういう姿勢をむしろ大切にしたい。その意味でこのたびのこといろいろと勉強になりました。(以下略)

改めて読み頭が下がった。拙作は未発表句である。
(句読点・圈点 喜孝)
(喜孝)

ご芳志多謝
大山 夏子 様

比来披見

ホトトギス 七月号
夏服は若き日のもの着ることに
橋涼み隣の橋を眺めつつ
沖 七月号
予報士の神田祭の話より
雨月 七月号
幼子の顔いっぱいのしゃぼん玉
槐 七月号
接木終へはや一木となつてゐし
馬酔木 七月号
一掬に揺る新緑五十鈴川
風土 七月号
荒々と虚子忌のさくら畠に鋤き
京鹿子 七月号
鉄線花町会長の任解かる
七花 七月号
農小屋の茶室によりか炬を塞ぐ
万象 七月号
大揺れの森を巣立ちのつばくらめ
山吹の挟まれてゐる寺の木戸
春燈 七月号
木々挙り天指す夏に入りけり
鳴 七月号
ああ言へばかうといふかに蜷の道
高橋 道子



喜孝抄

空 72号
苗木市雨は光の筋となり
末黒野 七月号
鶯や父祖の墓域へ声ゆたか
長閑けしや寺の耳門の少し開き
雲の峰 七月号
桜桃やふるさともや他郷めき
萱 八月号
炎天や鸚鵡は籠を咬み潰し
虚子の句を口ずさみたるさくらんぼ
嬉しい日ときどきありて鳳仙花
霽 七月号
何鳥彼鳥悲観桜のにぎにぎし
若楓風に小蜂をとばしけり
こだま 六月号
水遣る鉢増えて小庭も緑さす
ローマの釘
温める温めなおす春の宵
たんぽぽやにこつとされてむかつとす
行く春の息つめてから鳴る電話
ほらごらん猛暑日なんか作るから
水澄むや頭が よくておばかさん
ジョギングで届きいんげん豆みどり
開閉のボタンは対に夜は秋に

佐藤喜孝 著

青宮貝

を読む

末黒野をたちあがりくるものをりぬ

早春に村里近い野山を焼くのは枯れ木や草を焼き払って良い草刈り山を作るためである。

野山にある青草は牛や馬の飼料として最も大切なもの、青草のためにも枯れ枝や草を焼いてきれいにし、また焼いた灰を萌え出る若草のための肥料とするのである。そのほか色々な害虫やその卵も駆除してしまうことが出来る。

この野原を焼いたあとの草木の末の黒いことが末黒野という。

によるそう。二枚貝・アンモナイト・恐竜類が最も栄え、またこの白堊紀を最後に絶滅した。その後被子植物が出現した。四季と気候帯は白堊紀以後現在まで基本的に変化していないそう。世界的大海進が起こり、末期には大海退が起こり多くの動物群が絶滅した。この時期の大量絶滅の原因は、この他にも隕石の衝突などの説もあるがまだ未解決である。

恋文が届かない白堊紀へ行くのだろうか。「白堊紀へ」と言っているだけである。実際に過去の時代にさかのぼって行ける訳がないので思いを詠んだものだろう。

白堊紀に息づいていたであろう「もの」に思いをよせて、どんな植物がどんな様子で根付いていたか、二枚貝といわれるアンモナイトは色・形・また和名で菊石といわれているのはきつと見た形から来ているのだろうか！とか。恐竜ひとつひとつともなぜ二本足で歩く恐竜と、四本足で歩く恐竜が居るのか等々。

わが家にもアンモナイトの化石がある。また息子が三才くらいの時テレビで見た怪獣から恐竜に興味を持ち、息子が好きなものは親は好きになる？私もご多分にもれず好きになってしまった。その時に随分名前を覚えた。

佐藤 恭子



その末黒野にたちあがつてくるものがあるという。擬人法がつかわれているが、萌え出ようとしている草芽の生命力を「たちあがりくる」ものと言いついたことは赤ん坊が何もつかまらないでひとり立ち上がったときのような感動がある。期待感を充分感じさせ、やさしい表現で言い得て妙である。

恋文のまだとどかざる白堊紀へ

白堊紀とは、中生代を三分した場合の最後の地質時代名。今から一億四六〇〇万年前から六五〇〇万年前まで。名称はヨーロッパの白堊^{チヨウ}の地層がこの時期に多いこと

ティラノサウルスは二脚歩行で肉食、ステゴザウルスは四脚歩行で草食である事などいろいろ……。形の面白さ、肉食と草食では顔の大きさが違うなど、興味が尽きない。もつと良く知りたい・興味があるのだぞー・すきなのだーと。こんなに思い募っているのだと言うことが恋文なのである。このような思いを届けたい。届けてほしい、何で届かないのだろうか。返事が返ってこないぞ、どうして返事が来ないのだ……。と。

この思いが「恋文のまだとどかざる」といったのだ。人の世のことでも恋文という音のひびきは何と良いものである。私もさかのぼってみたいものだ。

因みに、かの有名なイグアナドンは、白堊紀前期に居たようだ。

始祖鳥の數羽は高所恐怖症

鳥類最古の祖先と考えられる化石動物。ドイツ南部のジュラ紀の石灰岩中から発見されたようだ。この鳥の大きさは、鳩と鴉の間ぐらいだそう。前肢は翼となり、羽で被われている体は鳥類のようである。歯のある顎・爪がある指・長い尾椎など爬虫類と鳥類の中間的特徴を

示している。胸骨があまり発達していない。果たして長時間の飛行に耐えられたかは疑問とのこと。

この始祖鳥の何羽かは高所恐怖症と言っている。見たわけでも始祖鳥に聞いたわけでもない。がそうだろうと断定をした。始祖鳥のことを熟知していたからこそ言えたのだろう。

生き物は皆それぞれの特徴を持って棲息している。二本足で歩く人間もあまり歩き方が上手でない人もいるし、とまっている枝から足をすべらした鴉を見たことがある。高いところが好きな人も大勢いるが、私など伊豆に行ったとき吊り橋の真ん中で動きがとれなくなつた事があつた。もしかしたら作者も高所恐怖症かもしれない。上空を飛んでいるであろう始祖鳥を見上げ「大丈夫か」と心配そうにしている顔がかんでくる。

二句とも無季である。無季ではあるが無季とは思ひ感じさせないそれを超越した面白さ、楽しさが充滿しロマンがあつて十分満足した。

ヒヨコがね花嫁人形グッドバイの子と日向

ヒヨコがね・花嫁人形・グッドバイと童謡の題名をな

水盤や晝の春蚊のありと
行く春の平壤見て来し話かな
こゝ夏やとみに瘦せたる金糸
舟行や月下の花涼あきらかに
夜振火の再びうつる障子かな
事とるて言葉少なく遠く水鶏
案内僧の百合折りにつと徑はづし
畑中や喜雨の最中の立話

船艫や潮さびしたる廟廊
水蓮に古び果てたる館かな
素煙の中の住居や星月夜
燈籠や月屋澄める高土化
秋雨やひと葉もあらぬ屋根飄
ゆさゆさと空山子かゝるて空舟かな
晝舫下りて野菊に遊ぶ娘生かな
戴り髪下ろして拾ふ落穂かな

らべただけかと思つた。子供と日向で一緒に唄つたのだろうかと思つていた。題名だけ並べるのでは……。子供は自分の氣に入つた歌と一緒に唄うと何回も何回もあきないで唄うものだ。子供が小さい時のことをふと思い出してつくつたのかとも。ところが日をおいて又読み返してみたら、何だこゆう事かとやつと分かりかけた。

「ひよこがね」とは小さい頃の子供それも訳のわからない生まれたばかりの赤ん坊、ヒヨコと同じようにピーピー泣いている頃のことだと思つた。このところが分かつてしまつと後は次々と鑑賞できる。

そのヒヨコがやがて年数を重ね育つていくとやがて花嫁人形のようにと。花嫁人形のようにとは日向ぼっこをしている子供は女の子ということになる。その子も自分も年をとりやがて別れの時が……。グッドバイ。曲の題名だけかと思つていたものがこんな深読みをしてしまつた。

作者を知っているからかも知れないが題名をならべただけでは面白くない。こんな事が隠れていたのではないかと。如何であろうか。

排鮮の満州に冬を能くけり
漢江へ掃き上る日冬の落葉な
暮れがての旅愁たある落葉な
この庭や冬の土の土氣あるばかり
大枯野不圖家ありて博奕打つ
飛雪に習ふ俳畫や文の龍
走り火も踏まき踏める杖火かな
道伴れの出来て離るる杖火かな

霜の夜や灯に包まれて荷揚船
畑中や火事の荷に鳴る時計
温定に去年今年なき恙かな
大雪やさかしてあたる溜氷石
雪の道隣へも掃き集るる
北月夏兒の次第に重く歩む
畑打に窓より告ぐる晝餉かな
晝汽笛鳴り合つて田打かな

あとがき

慣れぬひとりぐらしに力んでスタートダッシュしたら、その疲れが近頃出て粗相が多い。落ち着かなければと言ひきかせてゐる。

句会で似たやうな句があると云はれると力が抜ける。ひとの句にも余り使はぬやうにせねばと自戒していたをり、ひょんなところから三橋敏雄さんの手紙が出てきた。

わたしが手紙を出したきつかけは、先達が「おまえが発表した句に似てゐる句が敏雄句にあるよ、」とかなんとかいわれ手紙を出せと云はれた。わたしの出した文面はすっかり忘れたたがご丁寧な返書を戴いた。スランプは「97.6.21」文末に六月十八日半夜とある。夜半までお手をわずらはし申し訳なかった事を思ひ出した。手紙の一部を、

書顔やゆくわれに来るわれが會ふ

喜孝

来しわれに去るわれ語る残花かな

敏雄

について縷々書かれた上で

私の存在は一箇ではないとする考え方は誰が最初に言ったものかとは思ひ出せませんが先哲の言葉として流

布されており常識に近いもので行つていいでしょう。例えば永田耕衣作中に「数個の我」というフレーズがあり、高橋重信作に「水過ぎゆくここにかしこに我立つに」があります。探せばかなりあると思います。右のような次第で前記の作を含めて貴作品も拙作も残念ながら常識を踏まえたいわゆる盗類の句となろうかと存じます。しかし盗類ながらに心理状態の展開に微妙な違いがありますのでお互いに取り消さなくともよいのではと思います。 26頁へ

二〇一七年八月号

発行日 八月二十日

発行所 東京都中野区中央2-50-3

電話 090-9828-4244

ファックス 03-3371-4623

印刷・製本・レイアウト

竹僊房

カット／松村美智子・福井美佐子・ティリ エイマ

表紙・佐藤喜孝

会費 一〇〇〇〇円（送料共）／一年

ゆうちょ銀行（普）（店番018）4586402

佐藤 喜孝（サトウ ヨシタカ）